



Title	報告Ⅱ 内モンゴルにおける『フフ・トグ（青旗）』研究：満洲国における近代モンゴル新語研究を兼ねて
Author(s)	周, 太平
Citation	OUFCブックレット. 2016, 9, p. 15-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55512
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

内モンゴルにおける『フフ・トグ(青旗)』研究 満洲国における近代モンゴル新語研究を兼ねて

周 太 平

はじめに

日本の学界では、『フフ・トグ(青旗)』紙に関する研究は比較的多く、歴史遺産という視点を意識している。これに対して、中国の事情については、満洲国・蒙疆政権期における定期刊行物に関する研究は少ない。その原因は、もちろん資料を入手することが困難であることが一因となっているかもしれないが、もっとも重要なのはやはり学問空間である。それは中国の政治的イデオロギーからみれば、独立したモンゴル史はデリケートな問題である。しかしそうした昨今の事情を考慮するだけではなく、戦前の内モンゴルには全面的な再検討を要する問題があるように思われる。したがって、歴史の記憶が想起されるとき、現代モンゴル人の立場から歴史遺産としての植民地時代の諸問題への「関心」が惹起されざるを得ない。

本報告では、まず近年の内モンゴルにおける『フフ・トグ(青旗)』紙に関する研究を概況し、つぎに『フフ・トグ(青旗)』紙を用いた言語学に関連する所見を述べる。

1. 『フフ・トグ(青旗)』紙を用いた文学研究

『フフ・トグ(青旗)』紙と内モンゴル近現代文学研究については、内田孝(2015)「内モンゴル近現代文学研究からみた『フフ・トグ(青旗)』紙：モンゴル語定期刊行物の研究現況に言及しつつ¹」が詳しい。以下内田の論考をふまえつつ、若干の補足を行う。

満洲国・蒙疆政権期における定期刊行物に注目し、最も早く文学研究に着手したのは故ウ・ショガラー教授である。1990年、同氏は内モンゴルの文芸誌『ウネル・チチゲ』に

¹ 内田孝(2015)「内モンゴル近現代文学研究からみた『フフ・トグ(青旗)』紙：モンゴル語定期刊行物の研究現況に言及しつつ」、堤一昭・田中仁編『戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』のデジタル化と公開の可能性：東洋文庫政治史資料研究班・研究セミナーの記録』(OUFC Booklet 第7巻), 2015年, 37-64頁。

「Dalai-ača subud šügügsen temdeglel」[大洋から真珠をすくい上げた記録]を掲載した²。氏は、1939年7月刊行の『Mongxul-un Suruxa-yin Qoriyan-u Surxal Negegegsen Jil-ün Oi-yin Durasqal-un Sedkül』[蒙古学院成立一周年記念誌]から「xobi mangq_a-yin čečeg」[ゴビに咲く花]というタイトルの短篇小説を発見したこと、そしてこの作品が内モンゴル近代文学の珠玉の名作として高く評価できるとして全文を紹介した。この作品の著者は蒙疆政権期の蒙古学院や大阪外国語学校で教員を務めていたエルデムバートルである³。この作品はまた、『フフ・トグ(青旗)』紙の第36号(1941年11月22日)にも掲載されているが、作者の記載がなく、ただ「ケシケテンのデレゲル」と署名されているだけである。この署名がこの作品の作者であるのか、あるいは「紹介文」の筆者であるのか判然としない⁴。

続いて、バ・ゲレルト氏による文学研究を掲げる。氏は、満洲国・蒙疆政権期の定期刊行物の中から文学作品を選び出し、注釈を加えた。『ソーゴ・イン・ノゴ』[異草集]は、サブタイトルを「1931-1945年モンゴル文学選」とし、1998年に内モンゴル人民出版社から刊行された⁵。同書には132の作品が紹介されているが、主として『青旗』紙からの抜である。とは言え、この書籍には誤りが少なくない。近年、オルスガル氏らによって改訂作業がおこなわれている。

近年の文学研究には下記の論考がある。

- (1) オットゴンバヤル『近代啓蒙的なモンゴル文学：1902-1947』(博士論文)⁶、同「1941年の『青旗』紙に掲載された文学作品に関する考察」⁷。
- (2) 永花氏『満洲国時期的蒙古族児童文学研究：以満洲国蒙古文機関報為中心』(博士論文)⁸。
- (3) 小長谷由紀・サランゲレル・永花『偽満洲国における蒙古族文学に関する研究』(内モンゴル人民出版社2013年)⁹。

² Ü.Šuxar_a (1990) 「Dalai-ača subud šügügsen temdeglel」, 『Önir Čečeg』, 1, pp.49-55, 64.

³ 同上内田孝(2015), 48-49頁。

⁴ 『フフ・トグ(青旗)』紙, 第36号, 1941年11月22日, 第5面。

⁵ B.Gereltü (1998) 『Suxu-yin Noxug_a: 1931-1945 on-u qoxurunduki mongxul uran jokiyal-un songxuburi』, Übür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy_a.

⁶ Otqunbayar (2009) 『Odu üy_e-yin soyun gegeregülkü mongxul udq_a jokiyal: 1902-1947』, 内モンゴル大学博士学位論文。

⁷ Otqunbayar (2009) 「1941 on-u Köke Tux sonin deger_e neyitelegdegsen udq_a jokiyal-un sinjilel」 『Übür Mongxul-un Yeke Surxaxuli Erdem Sinjilegen-ü Sedkül』 3, pp. 95-104.

⁸ 永花(2009) 『満洲国時期的蒙古族児童文学研究：以満洲国蒙古文機関報為中心』, 中央民族大学博士学位論文。

⁹ Konařaya yüki, Sarangerel, Yüing Quwa nayiraxulun jokiyaba (2013) 『Qaxurmax Manju Ulus-un Üy_e-yin Mongxul Ündüsüten-ü Uran Jokiyal-un Sudulul』, Öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy_a.

2. 刊行物研究

内モンゴルにおける満洲国・蒙疆政権期の定期刊行物に関する研究としては、まずトゥイメル(忒莫勒)『建国前内蒙古地方報刊考録』(1987)¹⁰、『内蒙古旧報刊考録：1905-1949.9』(2010)¹¹、金海・忒莫勒・蘇德畢力格『從傳統到現代：近代内蒙古地区文化史』(2009)¹²を掲げる。またトゥイメル(忒莫勒)氏には「偽滿蒙政部の第一個綜合性蒙文月刊『蒙古報』」¹³、「偽蒙疆時期的『文化專刊』和『蒙古文化』」¹⁴がある。

ノンダグラ(努恩達古拉)『日本の植民地支配時期におけるフフ・トグ(青旗)紙に関する研究』(2013)¹⁵は、刊行物研究の視点から『フフ・トグ』紙を系統的に考察した個別研究である。

オットゴンバヤル「竹内正のモンゴル語刊行物出版事績」¹⁶は、満洲国時代に近代的な活版印刷技術を導入し、『モンゴル・セトグール(蒙古報)』、『モンゴル・シネ・セトグール(蒙古新報)』、『フフ・トグ(青旗)』などモンゴル語刊行物の出版事業に貢献した日本人・竹内正について考究する。

新聞史研究の視点からの概括として、オユン(烏雲)『近代中国におけるモンゴル語刊行物研究』(2013)¹⁷と・オットゴンバヤル「日本におけるモンゴル語定期刊行物研究」(2013)¹⁸がある。ノンダグラ(努恩達古拉)『フフ・トグ(青旗)』紙とその紙面配列について論じる¹⁹は、『フフ・トグ』紙の紙面構成について詳細な分析を行っている。

¹⁰ 忒莫勒(1987)『建国前内蒙古地方報刊考録』,内モンゴル自治区図書館編(フフホト)。

¹¹ 忒莫勒(2010)『内蒙古旧報刊考録：1905-1949.9』,遠方出版社。

¹² 金海・忒莫勒・蘇德畢力格(2009)『從傳統到現代：近代内蒙古地区文化史』,内モンゴル人民出版社。

¹³ 忒莫勒(2002)「偽滿蒙政部の第一個綜合性蒙文月刊『蒙古報』」,『蒙古学信息』第2期。

¹⁴ 忒莫勒(2004)「偽蒙疆時期的『文化專刊』和『蒙古文化』」,『蒙古学信息』第1期。

¹⁵ Nondaxul_a(2013)『Yapun-u koluniilal-un noyarqal-un üy_e-yin 「Küke Tux」 sonin-u sudulul』,中央民族大学博士学位論文。

¹⁶ Otqunbayar(2015)「Takeuchi Tadashi-yin Mongxul sonin Sedkül-un Ajillava」『Übür Mongxul-un Yeke Surxavuli Erdem Sinjilegen-ü Sedkül』2, pp. 84-92。

¹⁷ Oyun(2013)『Orčün ü y_e-yin Dumdadu ulus-un mongxul sonin Sedkül-un Sudulul』,Öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy_a。

¹⁸ S. Otqunbayar(2012)「Yapun deki mongxul toxtamal keblel(1905-1949)-un Sudulul」『Dumdadu ulus-un mongxul Sudulul』,NO.3, pp.127-135。

¹⁹ Nondaxul_a(2013)「Köke Tux sonin kiged tegun-nu qaxudasu bolung-un tokiraxululta-yin toqai ügülekü ni」『Dumdadu ulus-un mongxul Sudulul』,NO.1, pp.161-166。

3. 『フフ・トグ(青旗)』紙と歴史学関連研究

『フフ・トグ(青旗)』研究は単なる新聞研究ではなく、満洲国そのもの、あるいは植民地時代の内モンゴル社会の総合的研究である。

20世紀末に本格化した『青旗』紙に関する文学研究のほとんどは、上述『異草集』を用いた研究である。しかし、内田孝氏が指摘するように『青旗』紙に掲載された資料を研究をする場合、オリジナルの原文を確認する作業は欠かせない。『異草集』に収録されたテキストと『青旗』紙掲載の原文を比較すると、前者に誤記は少なくないことが分かる。

2004年、大阪外国語大学大学院での留学を終えたナランゲレル氏は、『フフ・トグ(青旗)』紙のコピーを内モンゴルにもち帰った。これによって、内モンゴルの人々は『フフ・トグ』紙の原文を初めて目にすることができるようになった。以来内モンゴル大学の研究者、とりわけ修士課程と博士課程の大学院生が『フフ・トグ』紙に関心を抱き、これを研究テーマとするものが排出した。

こうして文学の分野から始まった『フフ・トグ(青旗)』紙を用いたモンゴル研究は、しだいに歴史学の各分野において多くの研究者の注目するところとなった。以下、同紙を用いた近年の歴史学関連研究を発表順に列挙する。

- (1) ナランゲレル「ジャライトのアチンガと扎蘭屯師道学校」(2011)²⁰。
- (2) 王紅霞「ジャライトのナムハイジャブと『蒙古』誌に関する考察」(2011)²¹。
- (3) 王玉芹『満洲国期における新京の文化機構によるモンゴル語編集出版活動』(2011)²²。
- (4) 王紅霞『満洲国興安南省におけるモンゴル人教育』(2012)²³。
- (5) ナランゲレル「『フフ・トグ(青旗)』紙にみる近代モンゴル民族の女子教育」(2012)²⁴。

²⁰ Narangerel (2011)「Jalaid-un Ačingra kiged Jalan ayil-un barsi-yin yusun-nu Surxavuli」, 『Jalaid-un teüke soyol-un Sudulul』[扎賚特歷史文化研究], Öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy_a, pp.164-174。

²¹ Wang hong xia(2011)「Jalaid-un Namqaijab Ba mongxul kemekü Sedkül-un toqai sinjilel」, 『Jalaid-un teüke soyol-un Sudulul』[扎賚特歷史文化研究], Öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy_a, pp.418-428。

²² 王玉芹(2011)『“満洲国”時期新京文化機構的蒙古文編輯出版活動』, 内モンゴル大学修士論文。

²³ 王紅霞(2012)『“満洲国”興安南省蒙古族学校教育』, 内モンゴル大学修士論文。

²⁴ 娜仁格日勒(2012)「『青旗』所見近代蒙古民族女子教育」, 『内モンゴル師範大学学报』(教育科学版), 第9期, 26-29頁。

- (6) ナランゲレル「『フフ・トグ(青旗)』: 近代モンゴル民族の啓蒙思想関係の貴重文献」(2012)²⁵。
- (7) 周太平・王紅霞「1940年代における東モンゴルの職業教育」(2013)²⁶。
- (8) スチンバト「チンギス汗廟の建設過程とその歴史的意義」(2013)²⁷。
- (9) スチンバト『東モンゴルにおける植民地社会と文化の変容(1931-1945)』(2013)²⁸。
- (10) ナランゲレル「チンギス汗廟の建造に関する貴重な記載」(2013)²⁹。
- (11) ムーリン『日本の植民地時代における東モンゴルのラマ教改革に関する考察』(2014)³⁰。
- (12) 金栄『チンギス汗廟歴史研究』(2015)³¹。
- (13) ナヒヤ「蒙民厚生会の文化教育活動について」(2015)³²。
- (14) ジャン・チョクト『満州国期における東モンゴルの牧畜に関する考察』(2016)。
- (15) バイ・アルサラン『満州国期の興安地域における医療衛生についての研究』(2016)。
- (16) 包和芳『満州国期・新京のモンゴル関係団体』(2016)。

(14), (15), (16)は, 2016年度大学院修了予定者の修士論文である。

近年『フフ・トグ(青旗)』の紙面の見出しをリスト化する作業も進行している。ノンダグラウ氏作成の全号の主要見出しのリスト³³がある。またナランゲレル氏による全号のタイトルをリスト化した『記事細目』は, 2016年に内モンゴル教育出版社から刊行予定である。

²⁵ 娜仁格日勒(2012)「『青旗』(Küke tux): 珍貴的近代蒙古民族啓蒙思想文献」, 中国高校人文社会科学信息网『蒙古学集刊』第2期, 内モンゴル大学モンゴル学研究センター編, 1-17頁。

²⁶ 周太平・王紅霞(2013)「20世紀40年代東蒙古蒙古族職業教育」, 『中国・烏蘭浩特第二屆蒙元文化論壇暨科爾沁歷史文化研討会』, 内モンゴル文化出版社, 9-14頁。

²⁷ 斯欽巴圖(2013)「論奉建成吉思汗廟的過程及歷史意義」, 『中国・烏蘭浩特第二屆蒙元文化論壇暨科爾沁歷史文化研討会』, 内モンゴル文化出版社, 212-218頁。

²⁸ 斯欽巴圖(2013)『東蒙古殖民地社会与文化的變動(1931-1945)』, 内モンゴル大学博士学位論文。

²⁹ 娜仁格日勒(2013)「建造成吉思汗廟的珍貴記載」, 『中国・烏蘭浩特第二屆蒙元文化論壇暨科爾沁歷史文化研討会』, 内モンゴル文化出版社, 59-64頁。

³⁰ Müren(2014)『Yapun-u koluničilal-un üy_e deki Jegun mongxul-un Lama-yin sasin-nu ügereçilelter-yin toqai sinjilekü ni』, 内モンゴル大学修士論文。

³¹ Jin Rong(2015)『Čingis Qaxan-nu süme-yin teuke-yin Sudulul』, 内モンゴル大学修士論文。

³² 娜荷芽(2015)「論蒙民厚生会的文化教育活動」, 『首屆蒙古史研究青年学者學術研討会論文集』, 内モンゴル大学モンゴル歴史系編, 128-144頁。

³³ 同前掲注15。

4. 言語学の視点から

今日の内モンゴルでは、『フフ・トグ(青旗)』紙に関連した言語学研究はまだ行われていない。これに対して日本では、フフバートル氏による関連研究があり³⁴、その満洲国期の『新名辞字典』や『フフ・トグ(青旗)』紙などを用いて行われた考察は内モンゴルでも知られているが、残念ながら内モンゴルの言語学会ではあまり注目されていない。フフバートル氏の論考に触れ、私は、バダマオッスル教授(内モンゴル大学モンゴル言語研究所長)に、「特殊な社会言語学」なる科目の開講を提言した。すなわち言語を歴史的社会的要因との関連で研究するとともに、オリジナルな資料に対する詳細な分析を行う必要がある、ということである。この場合、満洲国や蒙疆政権期の定期刊行物は貴重な資料と位置づけられる。そこでは、モンゴル語の新語・近代専門用語の出現に関する新たな知見が期待される。

モンゴル語は、アルタイ語族のモンゴル=トルク系に属するが、20世紀以来の漢字圏文化が近現代モンゴル語専門用語などの新語彙の形成に強い影響を及ぼしたと思われる。『フフ・トグ(青旗)』紙は、戦前期のもっとも大きなモンゴル語媒体であった。同紙には、近代的な新語と思われる語彙が多く見られるが、これらの専門的新語の意味や概念について検討することは、近現代内モンゴルの社会変動を考えるうえでひとつの重要な糸口となり、さらに近代モンゴル語と日本語との言語接触史を確認することでもある。

これまでの関連研究では、モンゴル語の近代語彙は、中国語から導入されたことが強調されてきたが、『フフ・トグ』紙を見ると、満洲国時代に日本語から導入されたと思われるところが少なくない。モンゴル語近代語彙の変遷を日本語との関係で考察する必要がある。

満洲国時代におけるモンゴル語近代語彙の形成については、『フフ・トグ(青旗)』紙から貴重な関連情報を得ることができる。同紙によれば、当時はモンゴル人社会が日進月歩の一途を辿り、発展が非常に速く、専門的用語がますます欠けていることを人々は強く感じるようになり、言語的混乱状態になっていた。新語の翻訳をみなばらばらに用い、どちらが正しいかが分からず、まるで海のなかで迷いながら、方向を失い航行しているようだという³⁵。これは『青旗』紙第28号(第4面)に掲載されたト和克什克(ブフヘシグ)の一文である。同じ内容の日本語は、『新名辞字典』に序文として掲載されている(段落と区読点は報告者が加筆した)。

³⁴ フフバートル(2012)「モンゴル語の近代語彙と辞書(2): 蒙文学会翻訳『新名字典』(満洲国1941年)」、昭和女子大学『学苑』, 第859号。

³⁵ 『フフ・トグ(青旗)』紙, 第28号, 1941年9月27日, 第4面。

現在、蒙古文化の発達を図らうとする有志達は誰でも新名詞の不足に悩んで居ることは周知の事実であります。

ところが、新名詞の翻訳に当っては一人が斯様に訳すと、一人が左様に訳すし、そうかと思ふと又一人は別な文字を以って訳すので、実に千差万別の翻訳が出来て来ます。之を譬えて云ひますと、海を走る船が其の目標が余りに多い為に何れが本当の道であるかが判らなくなって遂に目的地に達しない内に沈没してしまふ様なもので、翻訳が一致しないと文化の進歩発展は多大な障碍となるは明かなところであります。之は只蒙古民族のみならず世界諸国の諸民族も一度は必ず此の困難を経過するのであります。

然も、此の新名詞の選定といふことは実に重大な問題である関係上、一人や二人の力では到底出来得ないもので、必ず中央の命令に従って始めて出来得ることであり、また普及をし有効にもなるのであります。勿論、本会の如く幼稚な団体の出来得る仕事でないことは自覚して居るけれど、満洲国内蒙古には本会の様な学術団体は未だ外に出来て居らないので、此の責任を他方へ移さうと思ふても受取るもの者が無いのであります。それが為め忍んで之に当って居る有様です。

本会康德六年四月から日本語の『学習便覧・日用辞典』を中心として、月毎に一般に使はれて居る必要な名詞及民生部が翻訳して居ない名詞を五十宛選んで出来るだけ満洲、日本、及西蒙古内の蒙古人並に蒙古文に秀れた日本人等百余名に一部宛御願ひし、月末に会議を開き此の訳してくれた幾多の方々の訳文の中から一番適当な名詞を選定するのであります。此の選定会議に出席される方々の御名前を記すと次の如くです。本会の指導者興安西省長諾拉嘎爾扎布、秘書官察隆阿、実業厅长ト和克什克、科長烏恩濟雅図、科長喀薩巴図爾、国民高等学校教師阿木古郎、及び額爾德陶克他呼、の諸氏です。以上の七名の方々は皆官吏でありますから休暇の時始めて集会出来るのであるし、又会議中に一つの名詞を選定するにも時としては色々議論する為相当の時間を費して始めて出来るし、早朝より晩まで研究して漸く五十の名詞が選定されるのです。斯の様に一語々々慎重に選定しますので、康德七年の末迄に漸く一千語の選定が出来た位です。此の一千語の名詞を察隆阿並に額爾德陶克他呼二人に頼んで解釈を付けて頂き省長始め一同が一つ一つ調整し然して印刷出来るには、急いでも康德八年八月末頃迄かかる様になってしまひました。又康德八年九月より引続き新名詞の翻訳を行ふ予定で居りますが、今度は出来る限り青旗報社に援助を御願ひして蒙古人に広く知らせ多数の方々に翻訳して頂く様御願ひしたいと思ふので、読者方の御援助を御願ひする次第であります。

此の新名詞については以上述べた様に何時か政府或は有力な学術団体が出来、此の新名詞を翻訳してくれる様になった場合は、本会は直に翻訳を中止するのですが、それ迄は出来る範囲に於て引き続き翻訳の仕事を致します。

ト和克什克 康德八年八月³⁶

³⁶ 『新名辞字典』、蒙文学会訳、佈和希格校閲、蒙文学会出版、石印、186頁、1941年8月。上記フフバートル(2012)より引用。

同序文は、『青旗』紙の第28号(1941年9月27日)の第4面にモンゴル語で掲載されている。ト和克什克(ブフヘシグ)によれば、日本語の『学習便覧日用辞典』から単語を選択し、モンゴル語の新語作成の基本とした。審査・確定済みの新語が『フフ・トグ』紙に序次に公開されていった。これらの新語は、『フフ・トグ』紙で確認することができるのである。

当時の定期刊行物・書物である『新名辞字典』、『ウラン・バルス』誌、『フフ・トグ』紙、『官用会話教科書』のほかに、さらに総務庁や民生部が発行した文書のようにまだ確認できていないものもある。これらについては、今後の調査に期待したい。

あらためて考えると、満洲国・蒙疆政権期におけるモンゴル語近代語彙には、学術的史料的价值が認められる。残念ながら、今日の内モンゴルの学界では、いまだこのことに関心が向けられていない。

このように述べると往時のあることが頭に浮かぶ。1985年5月のことだと思う。まだ学部生だったわたしは内モンゴル大学のウ・マンダフ先生につれられて、モンゴル語名詞術語専門会議に列席した。その会議において、ある研究者が満洲国期に使われていた一部の新語をいま採用しても構わないという論考を発表したとき、主要メンバーのひとりがただちに発言を遮り、「偽満洲国関連のものは討論の余地はない」と厳しく批判した。戦後、内モンゴル人は、確かに満洲国のすべてを否定せざるをえない状況に追いこまれた。しかし、過ぎ去りし日々の記憶を失ってしまうのは植物人間にほかならない。

おわりに

満洲国はモンゴル人にとってどのような意義を持つのか。今日、戦後の内モンゴルにとって満洲国とは何であったのかがあらためて問われている。かつて民国政府の国策として進められた蒙地開墾、とりわけ張学良政権の興安屯墾によって、モンゴル人は土地を奪われ危機に直面していた。このような状況下で勃発した「満洲事変」によって、内モンゴル人は、ようやく新しい時代を迎えることができた。満洲国はモンゴル文化啓蒙政策を実施したが、『モンゴル・シネ・セトゲール(蒙古新報)』、『フフ・トグ(青旗)』のような近代的な活版印刷技術によるモンゴル人の大量出版活動はその一例である。さらに「興安振興」の一環として、蒙古会館、蒙民厚生会、蒙民裕生会、蒙文編訳館、蒙文学会が設置され、モンゴル人のために多くの学校、病院、文化設備が作られた。『フフ・トグ』紙によると、

1941年から45年までの間に興安4省をはじめとするモンゴル人地域に各種の学校46校が建てられた、という³⁷。

歴史研究の視点から考えると、近代内モンゴルは日本の影響を抜きに語れない。20世紀はじめから、モンゴルは日本と深い関わりを持つようになり、とくに内モンゴル地域の動向は日本と密接に連動するようになっていった。すなわち、すでに近代化が進んでいた日本は大陸進出を強め、その過程で内モンゴルの近代化に大きくかかわった。モンゴル独立軍の編成や近代教育、生産技術の普及などインフラの整備によって、満洲国は、わずか14年間で「貧・病・愚・乱」状態にあった封建的な社会を近代社会へと改造した。これは歴史的事実である³⁸。

³⁷ 『フフ・トグ(青旗)』の1941-45年の関連記事によれば、1941年8校、42年20校、43年10校、44年6校、45年2校が建てられた。

³⁸ 周太平(2015)「近代内モンゴルにおける歴史の真実と認識の「真実」: プフヘシクの死因に対する異論」、『阪大法学』、第65巻第1号(通巻295号)、2015年、298頁。